

6. 猫実川河口周辺の現状

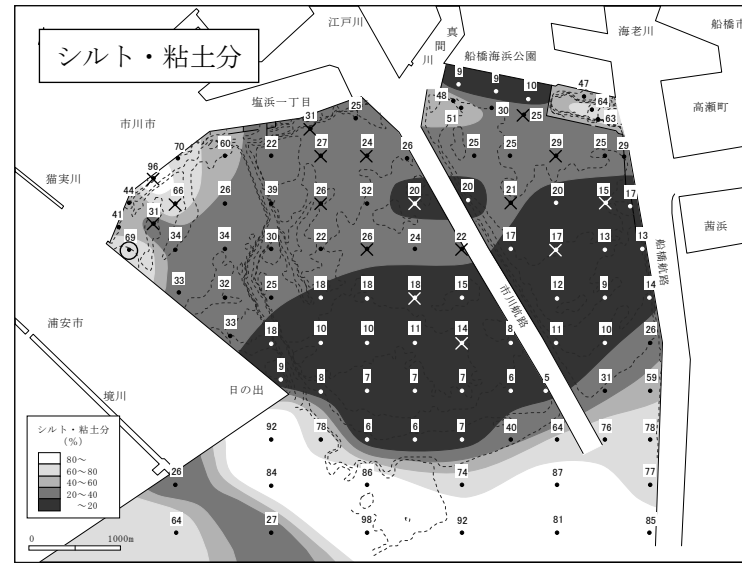
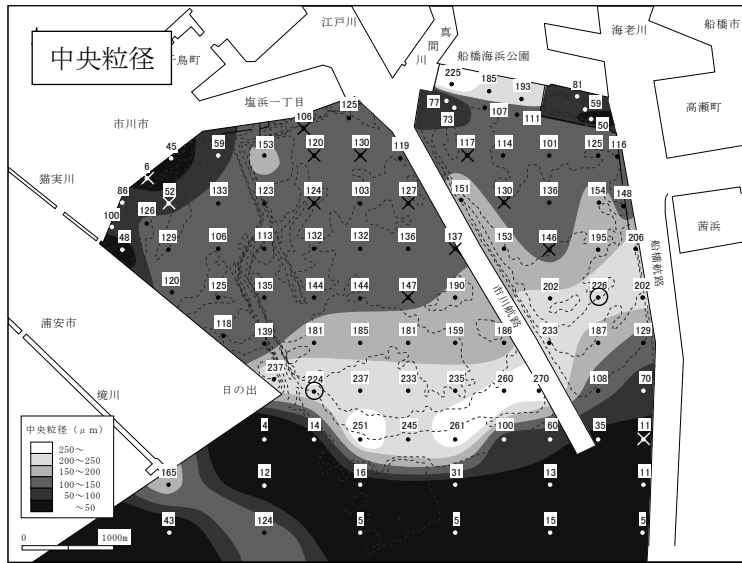
6.1 底質

本年度調査における底質項目の水平分布を図 6.1.1 に示した。

猫実川河口周辺の底質は、他の浅海域に比べてシルト・粘土分や強熱減量の値が高く、酸化還元電位が低い。この傾向は過去の調査と同様であり、三番瀬の浅海域において特徴的な底質環境を呈している。

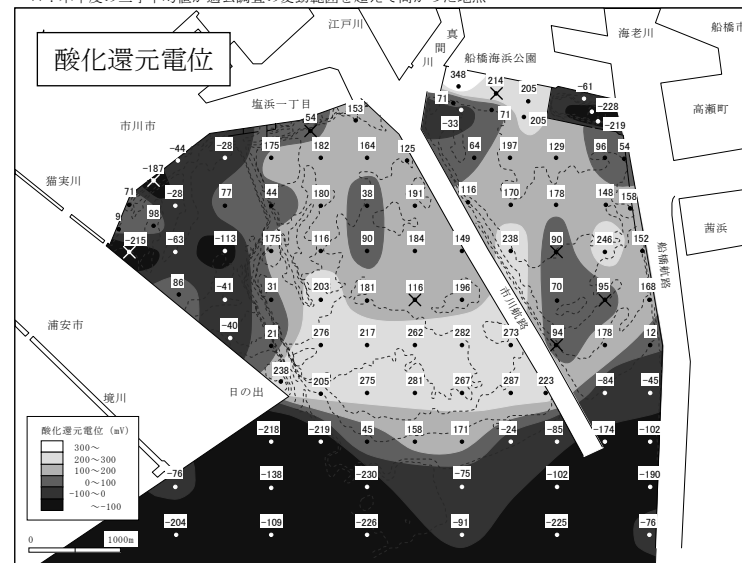
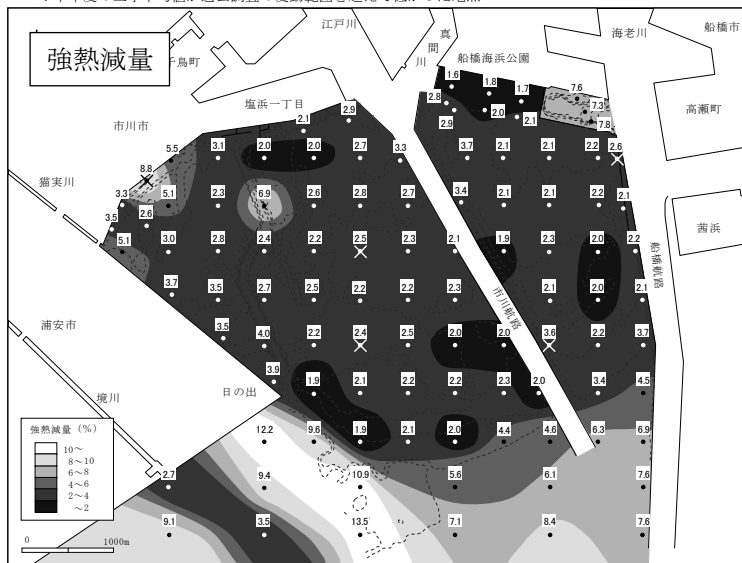
本稿の 4.1.1 にて底質環境の変化について検討した。その結果、本年度調査では塩浜護岸前面の滞筋で、過去の変動範囲を超えて、中央粒径および酸化還元電位は低く、シルト・粘土分および強熱減量は高い値を示していた。滞筋は周囲に比べ水深が深く、有機物を含む微細な懸濁物質等が堆積しやすい環境といえる。これらから、この区域は過去の調査時に比べ、泥分の堆積が進行していると考えられた。

滞筋を除いたその他の猫実川周辺の底質については、その分布傾向に大きな変化は認められなかった。



○：本年度の三季平均値が過去調査の変動範囲を超えて高かった地点
 ×：本年度の三季平均値が過去調査の変動範囲を超えて低かった地点

○：本年度の三季平均値が過去調査の変動範囲を超えて低かった地点
 ×：本年度の三季平均値が過去調査の変動範囲を超えて高かった地点



×：本年度の値が過去調査の変動範囲を超えて高かった地点

×：本年度の値が過去調査の変動範囲を超えて低かった地点

図 6.1.1 底質環境条件の水平分布 (本年度調査：三季平均)

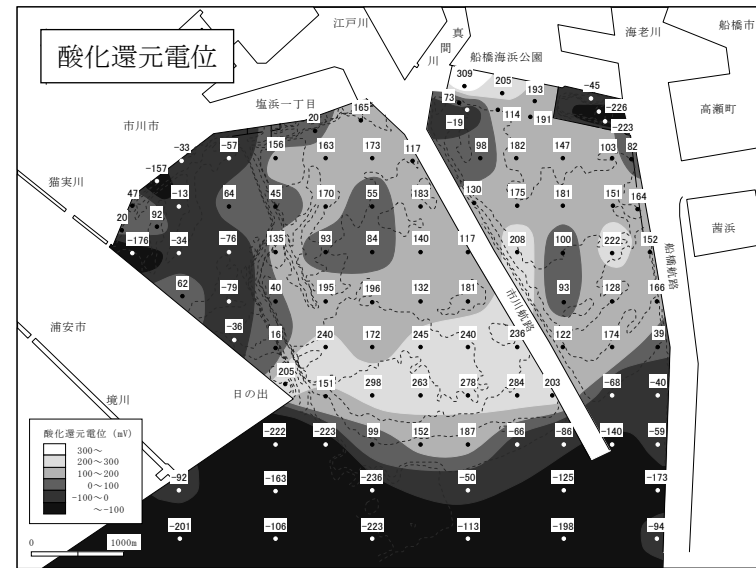
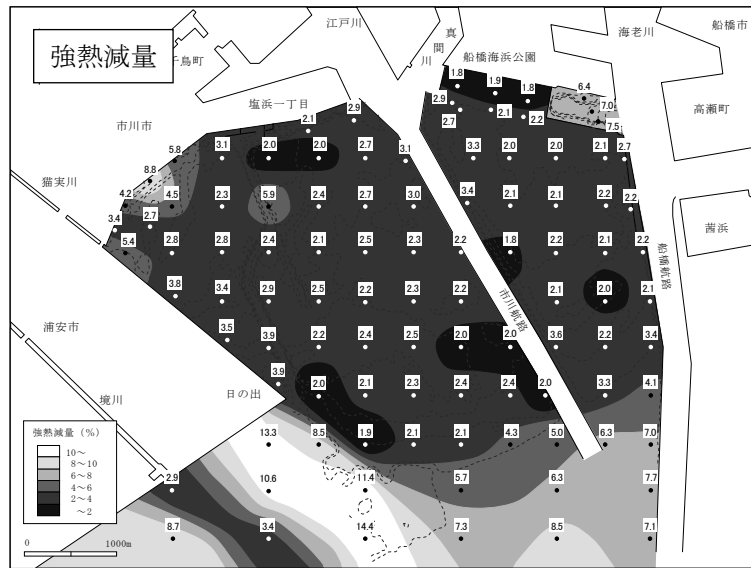
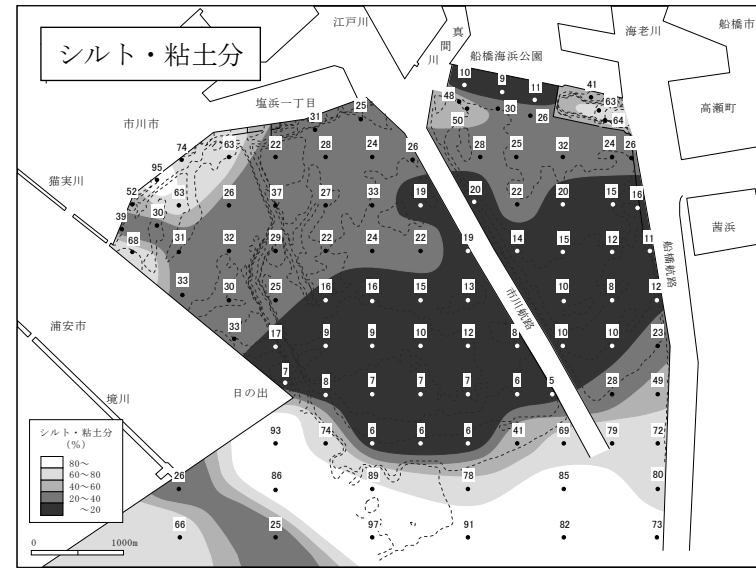
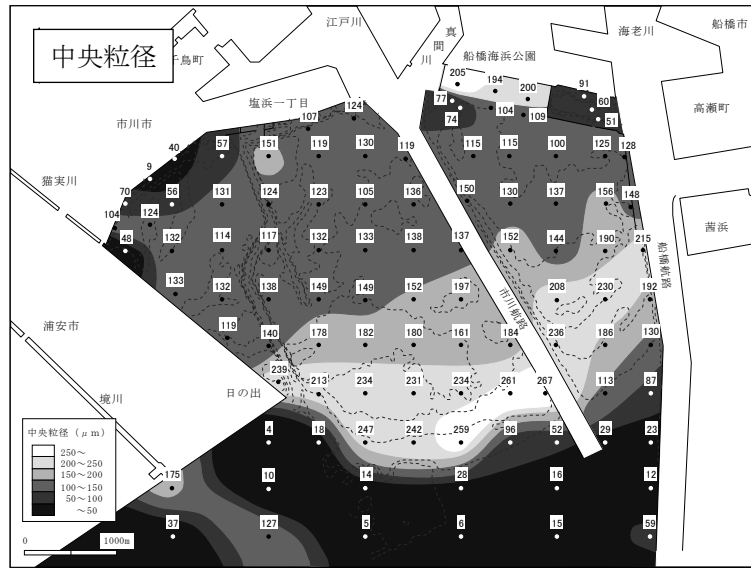


図 6.1.1(2) 底質環境条件の水平分布 (本年度調査：四季平均)

6.2 底生生物

本年度調査および過去の調査における、底生生物群集組成の類似度による海域区分を図6.2.1に示した。本年度調査における猫実川河口周辺は、過去の調査と同様に他の浅海域と異なる生物群集を示している。しかし、その区分の傾向および出現種には、過去の調査と異なった傾向がみられた。

そこで、補足調査でG1区分とされる範囲に位置する、本年度調査の9地点（3(b-2), 14(a-3), 15(b-3), 26(a-4), 27(b-4), 38(b-5), 305(ろ), 306(は), 307(に)）における上位種（個体数組成比5%以上）を算出し、表6.2.1に示した。また、上位種について、春季を除いた三季の平均出現個体数の水平分布図を図6.2.2に示した。

上位種の出現個体数をみると、コケゴカイ、ホトトギスガイ、ミズヒキゴカイの出現が多くみられ、過去の調査において主な構成種とされていたウミゴマツボやニホンドロソコエビの個体数組成比は低くなった。

水平分布をみると、コケゴカイ、ホトトギスガイ、ウミゴマツボおよびニホンドロソコエビは、猫実川河口周辺に主に出現し、ミズヒキゴカイやイトゴカイ科は猫実川河口周辺以外の浅海域でも広く出現した。

これらのことより、現在の猫実川河口周辺における主な構成種は、過去の調査に比べ変化しており、本調査海域において猫実川河口周辺のみに生息するとされる種の個体数組成比も低くなっていることが確認された。しかし、干出域カニ類等生息状況調査では、猫実川河口周辺のみヤマトオサガニや、高密度のアナジャコ属の生息孔が観察されているなど、三番瀬内では唯一泥質浅場に適した生物相がある場所といえる。本調査海域において、泥質の浅場環境を有する区域は他になく、生物多様性の観点からみれば重要な区域であると考えられる。

表 6.2.1 猫実川河口周辺地域の上位出現種

種名	個体数(個体/0.1m ²)	個体数組成比(%)
コケゴカイ	20	18.9
ホトトギスガイ	15	13.9
ミズヒキゴカイ	14	13.7
イトゴカイ科	7	7.0
ニホンドロソコエビ	7	6.4
ウミゴマツボ	7	6.3

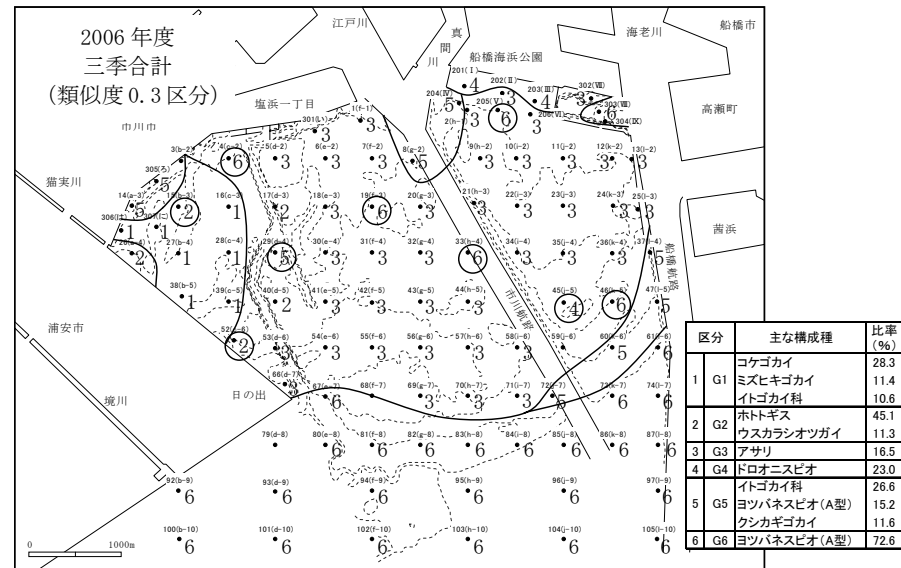
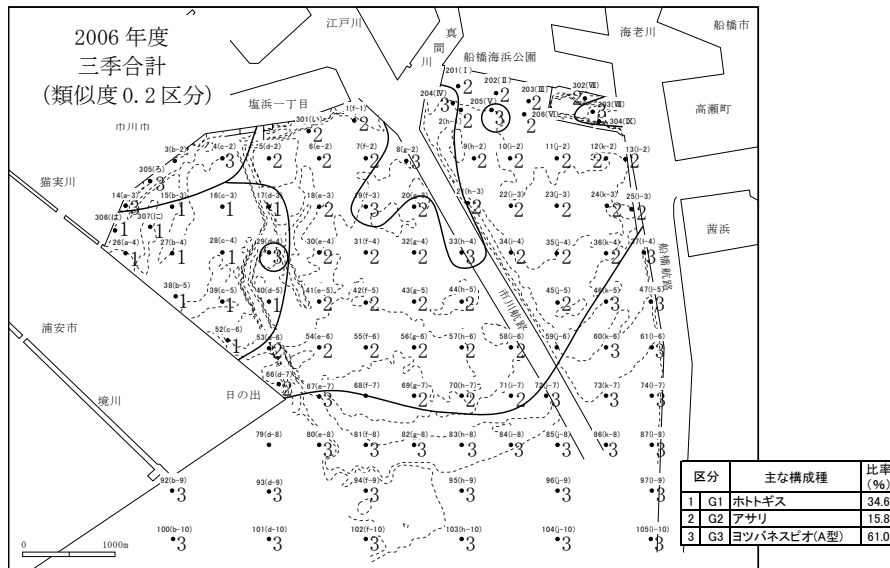
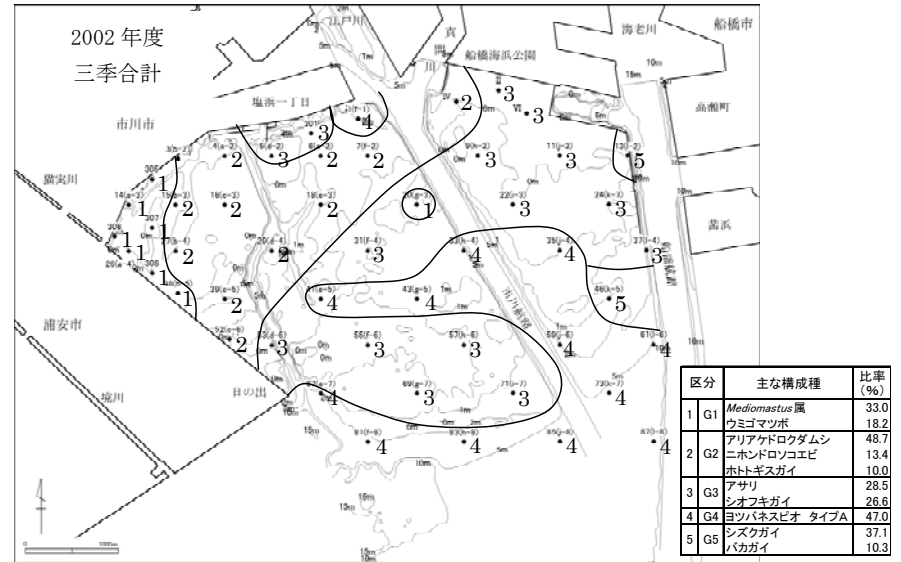
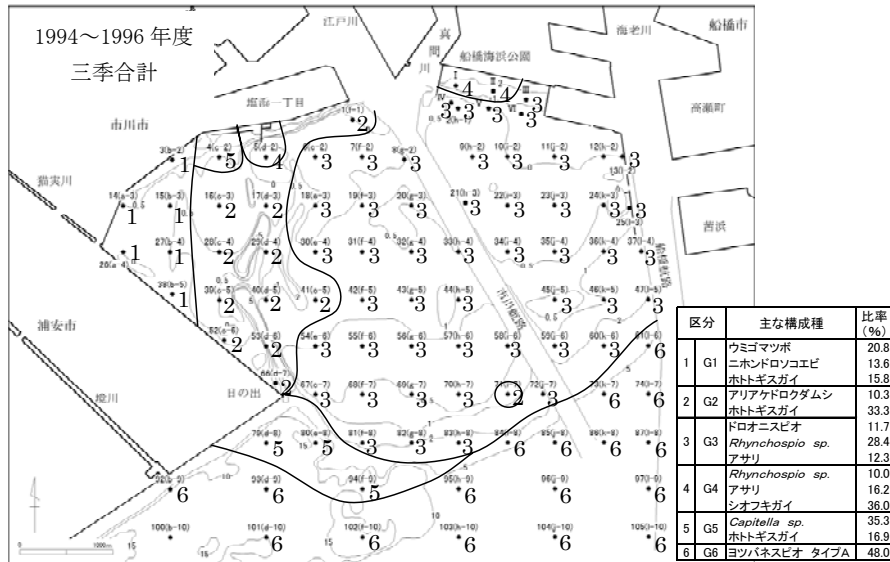


図 6.2.1 底生生物群集組成の類似度による海域区分 (三季合計)

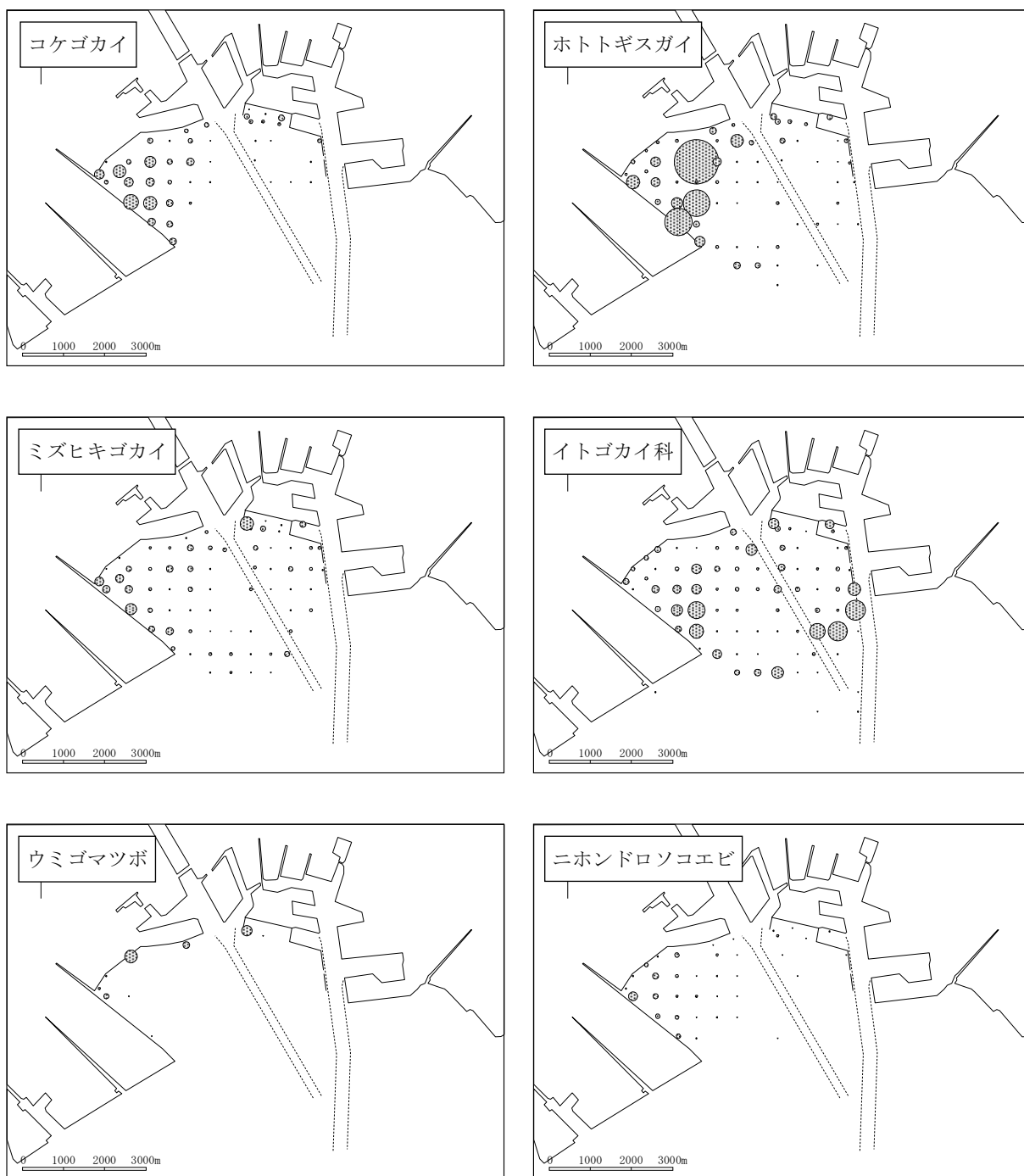


図 6.2.2 上位種の水平分布 (本年度調査: 三季平均)